

会長
BN
477
天野
俣明

MWVの年代を超えて繋ぐものは何か？

二つの山小屋、「なため」が代表するいくつかの部歌、バックルナンバー、厳しかったそれぞれのリーダー養成等々、数多くあります。しかし主体性ある部活ですが4年で卒業していったOBと年代を超え、継続して接するのが監督、コーチの指導陣です。

三十歳違ひの私の長男がMWWに入部した時、驚くことに監督は鈴木善次郎氏で、今でも私たちの共通の話題は善さんであり、善さんによつて繋がっています。やはり長い歴史と伝統の形成に人の要素が欠かせません。善さんに育てられた世代は年代が離れていて



題字 廉隅 進

第 50 号

明治大学体育会
ワンダーフォーゲル部
なため会会報

も、なんとなく通じ合うものがあります。

単なる私見ですが、今の監督、コーチの皆さんはできるだけ長く勤めていた。だき、善さん次ぐ存在になって、伝統を繋いで頂きたいと願います。

BN
423
紀井
辰之助
(初代編集長)

今から二十数年前 パソコンも携帯も現在のように普及していなかった頃に「薫風」が誕生し、今年五十号を迎えます。

当時現役には「漂雲」があり、また一年に一度部誌の発行がありました。が、OB会にはそうした機関紙がありませんでした。そこでOB会にも「漂雲」に代わる機関紙の発行を言うことになりました。

最初は名前もなく、「O・B会報」として発行し、その後当時OB会会長でいらした故廉隅先輩に名称を考えていただくことに決まり、お願いすることになりました。その時毛筆で書いていただくようお願いし、できたのが現在の「薫風」です。

後に知ったのですが、創部者である故春日井薫先生のお名前を一字いただいたと言うことでした。

こうしてまた一つ歴史を刻むものとして、部に残り後輩へと受け継がれて、節目の時に

想い起され、発展していくことを願っております。

BN
487
鈴木
康弘（第二代編集長）

平成元年（1989年）2月8日発行を以て、OB会報の創刊号として、始まった。「薫風」は、初代部長でありバックルナンバー1の春日井薫先輩にちなんで名付けられました。二十六年を経て五十号となる。創刊号から一緒に編集をやってきた石井克太OBの作成した「薫風」の歩みをひも解きながら、想いにふけています。さまざまな先輩、後輩次から次へと想い起こされる。わが部のOBであることともうれしく想う。また、明治大学体育会ワンダーフォーゲル部の歴史の一端をそのときそのとき伝える編集の仕事ができたことよかったと想う今。

『薰風』百号へ前へ前へ

O · B 会報

創刊号

○・B会報創刊にあたり

O・B 会会長 廉 隅 准



の一人としてひとしおの感謝を抱く。

とともに、日本における冒険活動。ドイツにおけるそれに例えを發するところ。ドイツでの活動は、各地の土人、冒険家、民族等、その國ならではの、という歴史の発展

のわ・M・W・Vの歴史は五十年を超え、いまや、本学独自ののきを備へてきたものである。創設当時の事情を知る者



日本の民衆、聖土、聖國など、国として独立自衛、つまり、ドイツとは別のアイデンティティがあるべきである。

最近、世界中にあって日本は、國際化の必要がある一隅外にかししい。外国人というものが、日本でいう「國土」ということが、いまだつひと未だないという。國際的政治經濟の参加といへば、その特長的政治的、經濟的要素に必要とした動きがベリシクなくはない。その特殊性を、國土のこの位置を離れて声高叫ぶ必要はないと見なそう

がやがやと見舞いに来た。西村には、五十年の歩みを通して達せられたい、伝統としてのトリアシッショがある。そのすべてを伝へ守りよというのではない。「善い伝統とよい因襲」との間にあつてはよい平和を保つべきであらう。日本固有の、本学特有のWV運動を期待するときに、「相対して同等」と一語ことばは付け加へて、本学編纂のありさうと致しす。

2015年 8.29 全国の山頂でMWV創部80周年を祝おう!

創部80周年を祝い、その記念ワンデルングとして、全国一斉「オールなため会」ワンデルングを実施いたします。

◆全国一斉「オールなため会」ワンデルング◆

- 今年の8月29日(土)にMWV学生となため会会員が一斉に“それぞれの山”に登って、正午に撮った山頂からの記念写真と「心に残る山」等の思い出文や近況等(1行でもいい)を書いていただき、なため会企画振興部に送付していただく企画です。
- 地域のOBが誘いあって集まっていたいただいても、同期の集まりでも、一人だけでもかまいません。
- 面白い写真や面白い文章、感動の文章をよせられた会員には、80周年実行委員会が選定し、賞品を贈呈します。また、送っていただいた写真や文章は80周年記念薫風特集号(本年末)に掲載します。
- 地域のOBが集合して一緒に祝えるよう、まとめ役になっていただく方を決めて地域会員に連絡できるよう活動する予定です。奮ってご参加ください。

【要領】

1. 対象：ワンデルングの地域は、現住所のある地域に限らず、全国どこでも(海外も可)結構です。また、登山(山頂)に限定することなく、ワンデルングと自認する地(山でなくても公園や史跡等でもお好みの場所)ならどこでも結構です。
2. 期日：8月29日(土)正午とありますのは、「同日同時刻に明大ワングルの仲間がどこかで80周年を祝っている」ことが、とても素敵なことだと思うからです。
ただ、悪天候や日程の都合等で別の日時でも結構です。
3. 参加記念旗：
8月10日までに、「なため会企画振興部」にお申し込み頂いた方に配布いたしますので、記念写真に使用してください。(旗の画像を送付で各自プリント案もございます)
4. 送付期日：9月20日までに次のとおりご送付ください。
5. 送付方法：実施地での記念旗を入れた記念写真と紀行文(近況報告等で可)を郵送・eメール「なため会企画振興部」・Facebookなどの方法でご送付ください。
6. 参加者：なため会員1名以上で成立します。
※一斉ワンデルングとは別に、個人的に一押し(私の一名山)、又は地域ごとでゆかりの山(お国自慢の山)、又は80周年の為に登ってみた山や行ってみた所(恩着せがましくて結構です)など、今年(2015年)の4月1日から来年の3月31日までの期間でトピックスがありましたらお気軽にご連絡ください。会員の近況として80周年記念薫風特集号に掲載いたします。
※現役とのジョイントワンデルングも計画しております(日時未定)

詳細のご案内は、薫風(7月末発行)、メール、FAX及びなため会掲示板で行います。

【お願い】

なため会にFAX番号及びメールアドレスを登録されていない方は、この機会に是非、登録をして下さるようお願いいたします。このほかにも、なため会の各種行事をご案内します。

メール登録方法：「メール登録」と記し、バックルナンバーおよび氏名を明記のうえ、

なため会総務部 soumu@natamekai.org にご送信ください。

【実行委員会メンバー】

717 住田 孔一 (実行委員長)							
728 横尾 廣志	751 諏訪本充弘	775 小田野義之	795 濱田 稔	835 猪狩 稔			
871 平田 正博	897 山下 仁志	1006 安倍 好洋	1115 上原 誠	1174 尾崎 剛史			
三年部員 永田 真帆	前川 晃慶	二年部員 由水 雅也					

盛りあげよう！ 八十周年

実行委員長 BN 717 住田 孔一

この度、運営委員会の推挙により記念事業実行委員長を拝命いたしました住田でございます。

振り返れば、我が明治大学ワンダーフォーゲル部は大学ワンダーフォーゲル部のルーツ校として戦前の風雲急な時代、昭和十一年二月二十一日に創部され以来八十年の歴史を刻んで参りました。

記念行事のため実行委員会が昨年七月に現役三名を加えた十四名で組織され、多くの企画が検討されて参りました。

現在までに期間は平成二十七年四月一日より平成二十八年三月三十一日までの一年間として、全ての行事を八十周年の冠を着けて記念イヤーを祝う。記念事業として刺繍ワッペン制作・全国各ブロック集中ワンデリング・大キャンプファイヤー・写真集や記念祝賀会が計画されております。今後詳細が決まり次第順次ご案内差し上げる予定であります。

なため会の皆様には、これを機に創部時代の歴史的意義と今日までの活動を振り返り、将来に向かった新たな出発点として現役・なため会を盛り上げて頂き、各行事に奮って参加いただければ幸いです。

2014年度 明治大学体育会ワンダーフォーゲル部 なため会
幹事会・忘年会

■日時 2014年12月9日(火) 18時30分～20時00分 ■場所 明治大学 岸本・宮城ホール

◆式次第

18:30 幹事会

議案および決定事項：

- 1) 明治大学体育会ワンダーフォーゲル部 創部 80周年記念事業計画について
⇒ 2015年度(平成27年度)に実施することとする
- 2) OB会発足年月日について
⇒ 1955年(昭和30年)1月24日とする

BN. 197小林碧相談役より「草津白根山小屋落成(昭和29年11月7日)後、山小屋の管理運営について話し合うため、広くOBに呼びかけて会合が開かれた。部の創設者である春日井薫先生(初代OB会長)も出席された中、当時は有志毎で別々に行われていたOB会を一つにまとめようということで話が一致した。よって、この日を発足日としてはどうか」とのご提案があり、協議の結果この日を発足日とすることに決定した。

その他報告：

- 1) 2014年度 事業計画 進捗報告
- 2) 創部80周年記念事業 準備進捗報告

18:45～ 忘年会

◆出席者：45名(会員37名、学生8名)



■平成27年度なため会ワンデルングのご案内

企画振興部

新緑の妙義山、豪雪と雪崩による造形美の谷川岳、陽だまりの三浦半島ワンデルングを行います。年間スケジュールを押さえていただき、ふるってご参加下さい。

期 日	地 域	案内時期
5月23日(土)	妙義山	4月中旬
8月29日(土)	谷川岳	7月中旬
2016年 2月6日(土)	三浦半島	12月中旬



8月29日は、創部80周年記念「全国一斉「オールなため会」ワンデルング」に合わせた企画です。

■連絡先の案内

住所変更や慶弔事など、なため会々員の動静については、下記の総務部アドレス宛にメールで送信していただくか、または直接下記担当者まで連絡願います。

総務部アドレス: sounmu@natamekai.org

総務部 松井 法一 (974)

住所: 〒120-0043 足立区千住宮元町13-2

電話: 03-5829-8077 (090-8649-0849)

メール: shu-ken@ntd.biglobe.ne.jp

黒檜山山行

「なため会秋の一泊旅行会」

BN 838 龍 君江

10月25日、懐かしい顔を見つけて、挨拶を交わしながら、高崎駅中央改札口に集合する。全員揃ったところで、マイクロバスで赤城山の大沼に向かう。途中、隣の地元出身の菊池(丸岡)OGから赤城山という山はなく、黒檜山を最高峰とする山塊を呼ぶが、黒檜山は眺望は良くないと教えてもらう。どうりで、ガイドブックに赤城山が載っていないのか納得しました。

紅葉の中をバスは山道を登り、大沼に到着。ここで、観光コースと分かれ、出発する前に浜田OBの指導で入念な準備体操を行う。現役とは違い、準備体操は必須だ。終了後、平田OBをコースリーダーに出发する。登山口から、樹林の中の急登となる。登山客が多く、すれ違うのもやつとの道で、休憩を取りたくても、なかなか休めない。樹林の中から時折、下の大沼が輝いて見えるが、展望はきかない。岩のある急な山道を延々と登ると、熊笹の稜線に出る。山頂に向かって歩くと、すぐ、先発隊の諏訪本監督等が待っていた。山頂は人で一杯のことでしたが、とりあえず山頂へ向かう。指摘の通り、山頂は人だかりのうえ、樹林が伸びていて、展望はきかない。5分程行くと見晴台があるとのことなので、そこま



で行く。こども、人ばかりだが、谷川を含めた上越の山、北アルプス、日光白根まで、360度の展望を楽しめる。隣の登山客から、そこに槍ヶ岳が見えると言われ、大喜びの我々でした。先程の先発隊の所に戻り、皆で昼食。快晴で、さわやかな風が汗ばんだ顔に心地良く、満足気な顔が広がっている。ここからは日光連山が見え、麓にはまだ紅葉が鮮やかに見える。昼食後は恒例の山頂での写真撮影だが、順番待ち。やつと撮り終え、駒ヶ岳へ向かう。

山頂より、下るとすぐ御黒檜大神の祠が見え、ここから階段道の下りが始まる。一気に下り、大ダルミに出ると稜線がはつきり見え、後ろの黒檜山の大きさを感じる。駒ヶ岳までは、一息だ。駒ヶ岳は渡良瀬川方面が良く見える。ここまで足を伸ばす人は少ないらしく、静かな山頂だ。我々が一休みしていると、2人連れの山ガールが登場し、優しい男性達は彼女達に写真を撮ってあげる。ところが、お礼を言って彼女達は、もと来た道を戻ろうとする。慌てて、誤りを指摘すると、また感謝される。紅葉の樹林の中を一気に下る。地藏岳、小沼等が樹林の中から時々見える。しばらくすると木や鉄の階段が延々と続く急な道となる。登りがこの単調な道だったら、辛かったなと思い、コースの企画に感謝する。前を行く人々を追い越し、樹林の間に大沼が見えてくると、集合地点も近い。ジグザグに下って行くと、観光コースの人達が拍手で迎えてくれる。この後、マイクロバスで、宿泊地音

羽倶楽部へ向かった。
最後に、企画の方ありがとうございました。

空色山の会黒部源流山行

BN 705 杉山 裕

二〇一四年空色山の会最大行事は、飛騨山脈（北アルプス）の真ん中黒部川源流の山々を七月二四日から四泊五日で巡るものでした。参加者六名（男女三名づつ）とやや寂しく、三千mを超える山こそないものの雄大なスケールの大展望とお花畑・雪渓と充実した山旅でした。

二四日六時に新宿を出発、椎橋会長（BN505）の運転で中央高速・安房峠を経て富山の有峰湖折立へ。午後一時過ぎ、ここからいよいよ五日間の始まりです。あいにくの小雨でしたが、暑くもなく登りには好い感じでした。太郎平小屋が見えてくる頃には雨も上がり、小屋からは明日から巡る山々も顔を出し期待が高まります。今日の実働四時間強、夕食にも間に合い、アルコールも適度に摂って英気を養いました。

二日目、七時前、出発時雨は上がったものの合羽・スパッツ装着。太郎山・北ノ俣岳（上ノ岳）へと湿原やチングルマ・コバイケイソウ等の草原の花畑、ハイ松・雪渓等変化に富んだ緩やかな稜線を進むにつれ日差しも出て展望も開けてきました。雨具も外して軽快に上り、北ノ俣岳手前で右からの神岡新道を合

流、ここから富山・岐阜の県境尾根。左に薬師岳の大きな山体と平らな雲の平がこれからずっと同行、右には特徴的な三角錐の笠ヶ岳も見えてきました。赤木岳を越え中俣乗越で昼食後、黒部五郎岳への今日最後の登り、アップダウンがいくつもあり結構なアルバイトです。肩まで出てザックをデポして、黒部五郎をピストン。頂上ではだいぶ雲が湧いてきましたが、雲の切れ間から北に立山・剣、反対側に槍の穂先も望めました。肩からのカール底への急下降は楽園のようなお花畑の道です。下りきった雪渓でのどを潤し、夜の水利用の冷水補給も十分にしました。雪渓ではNHKのクルーが日曜朝の番組「さわやか自然百景」撮影とかで動物を狙っていました。今日の宿は樹林と草原の間の黒部五郎小舎です。実働七時間。

三日目五時半出発、いきなりの急登三〇分強で樹林帯を抜ける。だらだらと登り、三俣山荘へのトラバースルートを手を左に分けて更に三〇分強で富山・岐阜・長野三県境の三俣蓮華岳頂上。三六〇度の大展望は圧巻、南から反時計回りに槍穂高、表銀座、鷲羽、水晶、遠く立山・剣、後立山・薬師、手前に雲の平、遙か西に白山、そして昨日越えてきた黒部五郎の立派な山塊と連なり、なかなか立ち去り難いものでした。ここから北へ富山・長野県境を進み三俣山荘で長めの休憩。鷲羽岳の三〇〇mの登りは疲れの溜ってきた体にはこたえました。頂上で昼食を摂り、ワリモ



岳等岩稜帯の景色を楽しみつつ足元にも注意しながら二事前に水晶小屋到着。ここは標高二九〇〇mあるので三千mを超えると高山病の出る松本さんはお疲れで小屋に残り、他の

五人は今山行最高峰水晶岳（黒岳二九八六）へ。明日は天候悪化するので今日のうちに上りました。松本さん以外の秋山・横田さんの空色山の会最強女性たちもさすがに疲れがたまり、高山病の気味もあつて食欲も落ちてきました。きれいな好きの大賀さん（BN 661）は雪渓で靴を脱ぎ手足を清める余裕。さすがに男たちも顔にむくみが出てきて酒はやや控えました。実働水晶ピストン除いて七時間強。

四日目、朝から雨と風とガスで視界のきかない中六時前出発。雲の平山荘でゆっくりとコーヒーを飲んだ以外は、何も見えずにスィス・ギリシャ・アラスカの庭園もすべてスツ飛ばしてひたすら下るのみ。薬師沢小屋でやっと晴間が出てきて昼食。雨具を外して薬師沢をゆっくり遡行していくうちに天気は急速に回復し、太郎平に近づくころには超えてきた峰々が見えてきました。達成感に浸りつつ太郎平小屋に戻ってきて、祝杯を挙げました。実働約七時間半。

五日目、今日は下るのみ。六時過ぎ小屋を出ると下山方向になんと白い虹が。虹に向かって気分良く下り一〇時前折立到着、実働三時間弱。岩場や雨で滑つての転倒もあまりなく、高山病もひどくならず全員元気で下山できました。平湯温泉で溜った垢を洗い落しました。無防備に強烈な陽に焼かれたため一番ぬるいお湯にししか入れませんでした。入浴後思い思いの食事を摂り、思い出話で盛り上がりつつにぎやかな帰途につきました。

情断会秋季ワンデルング

「荒船山&黒斑山・蛇骨岳」

BN 776 高島 昇

十一月一日（土）小雨、午前七時半、桶川駅に小田野、小川、宮澤、高島、それに地元原田君のいつもの五人が久しぶりに集合した。夏、度重なる台風で「北アルプス行」が中止となり、それぞれ自主トレーニングを積んでの秋季ワンデルングである。最近、新車を購入した原田車で関越東松山ICを目指す。平地でも紅葉が進んでおり美しい景色が目に入る。インターチェンジまでの車中の話題は、畑や人家の庭にたわなに実った柿が、甘柿か渋柿かと議論白熱、結論は鳥も食べない「渋柿」となった。高速道では、原田車のハイブリット性能、ナビの凄さを全員で体感、助手席の小田野がやたらとナビを弄って後部座席の全員から叱られていた。関越道から上信越道へと渋滞もなく走行、今話題の下仁田ICから一般道に入る。途中、コンビニで買い物と小休止をし、下仁田町役場を右手に見ながらこんにゃくの看板が目立つ「西上州やまびこ街道」を進む。長い綺麗な下仁田トンネルを抜けて、しばらくで「峠の茶屋」である。そこから林道に入り荒船山登山口「内山峠」に到着する。十台前後は駐車可能な内山峠であるが、生憎の雨で、駐車していた車は、下山するまで原田車一台のみであった。



みんなが忙しく雨支度の準備をしていると、(敢えて名前を出さないが……)「スパッツはカッパの上から?それとも下?」と聞いている奴がいたので、小田野がいつもより丁寧に説明をしていた。聞いた奴は小田野以外の四人のうちの誰かであるが、おのずと分かるものである。登り口に少し迷ったが、小雨の中、午前十時三〇分過ぎに峠を出発する。しばらくアップダウンを繰り返して、一時間ほどで「一杯水」に着いたが、夏でもないのに水を飲む気にはなれない。それから程なく、避難小屋兼東屋のある「鱸岩」テラスに到着した。晴れていれば、浅間山や八風山などが望める断崖絶壁の眺望の良い所のである

が、ガスって何も見えず、その迫力が分からなかった。記念撮影だけは怠らず、三台のカメラで十秒タイマー同時撮影を楽しんだ。雨の為、広めの東屋でゆったりと昼食を取った後、緩いアップダウンを繰り返して、四十分掛けていわゆる荒船山のピークである経塚山(二四二二m)まで歩いた。ここは、灌木も多く展望は望めそうにないようだが、生憎の雨で景色はなく、早々に帰路に着いた。一時間半ほど黙々と歩き、内山峠登山口に到着して、本日の山行は終了である。軽いストレッチをして、(原田君には申し訳ないが……)汚れた山靴のまま新車に乗り込み、本日の宿泊先である「東急ハーヴェストクラブ 旧軽井沢」に向かう。ホテル到着後、濡れた衣服を乾かして、大風呂で冷えた体を癒し、軽井沢駅近くの地元居酒屋で夕食をとり、起床時間を決めて就寝となる。

二日目、公平の提案通り四時起床、各自朝食後、ホテルを五時出発となった。チェックアウトの際、眠気の残るフロントマンに「イヤミ」を言われながら「素泊り料金」を払った。心配した雨は上がっているが、濃いガスの為、目的地の「車坂峠」まで車の運転も緊張する。ビジターセンターのある高峰高原ホテル前(車坂峠)に車を止め、準備運動後、六時半、表コースで黒斑山や蛇骨岳等々を目指し出発する。

雨は落ちて来ないが、かなりの時間、雲の中を歩きながらの緩い登りである。時々切れ

るガスの間から紅葉した景色や眼下の街が見えると歓声があがった。歩く道はしつかり整備され、火山観測のケープルなどが長く続き、シェルターと間違えた避難小屋を経由して約一時間半で「トミの頭」に到着する。その後、二十分ほど黒斑山(二四〇四m)である。ガスは薄くなったが視界はまだ悪く、標識の前でお揃いの手白小屋Tシャツを全面に出して記念撮影をした。この辺りから、一瞬ではあるがガスが切れ、紅葉した下界の景色が目の中に入ってくる。緩やかな稜線だが強い風が吹き抜け、右手には荒涼とした前掛山が見え隠れしながら進むと蛇骨岳(二三六六m)に到着する。それから、二十人ほどの山ガール隊を足早に追い越したりして、蛇骨岳を下る頃には、視界も晴れ、気持ちよく仙人岳を通過、鋸岳手前のJバンドから賽ノ河原へ急降下する。明大ワンゲルOBならそれほど緊張する下りではないが、六十過ぎのおやじ登山家達の中には、膝に病を持つ者もいてゆっくり下る。ただ、振り返った断崖絶壁の景色は圧巻であった。浅間山の噴火の凄まじさがコースの両側に現われ、特に噴石の大きさに驚きながら、前掛山登り口を過ぎ、硫黄臭が漂う熊笹に覆われた「湯の平口」分岐まで進む。ここで昼食を済ませ、草すべり経路でトミの頭まで急登したが、コースタイムより良いペース(一時間程)で到着した。逆コースではあるが「こんな時刻でどこまで?……」というパーティーにすれ違ったが、無

事を祈り「トミーの頭」から一気に中コースを下った。道は前日の雨だけはなく、長い年月で浸食されて歩きづらく、それに加えコースリーダーの道取りにも難があった。ブツブツ言いながらも、仲良く下る五人であり、一時間二十分で今朝の駐車場に到着した。高峰温泉で日帰り入浴と考えていたが、近くの高峰高原Hのお風呂で汗を流し、サッパリして帰路に着いた。少し天候に恵まれなかったが、今回も原田君の企画良く、楽しいワンデリングであった。

66歳の南会津リーダー養成W

BN 683 横手 一男

今年も同期会「獅子の会」で南会津のクビレ田代（大丈田代）へ行くことにしました。仲間の間では今回でラストだとの思いがある。平成26年8月27日、29日で、参加者は西島兄（町田市在住）、鈴木義兄（いわき市在住）、森田兄（名古屋在住）、金原兄（島田市在住）横手（東京在住）の5人である。27日東武浅草駅発8時10分快速で会津高原尾瀬口駅11時21分着。ここで、いわきから来た鈴木義兄の車で松枝岐へ入り、七入橋の手前から実川林道に入る。矢櫃沢橋に車を止めて、登山の準備をする。13時20分。天気は曇りで、まあまあだ。沢の側の小さな尾根を急登する。一汗かいて休憩する。森田兄が先頭で体調が良いようだ。明瞭な尾根に取り付くと、斜面が緩

やかになる。平成21年11月から毎年行っている。西島兄と鈴木義兄は地形の様子が頭に入っている様だ。二重尾根を越えると、スズタケの藪漕ぎになる。最初の年は正確に尾根どうしに歩いたので藪漕ぎの苦労を強いられた。今は獣道を利用して藪の薄い場所を歩いて尾根を外さないように進む。鞍部からは、スズタケの藪漕ぎになる。これも獣道を利用して歩くが、いろいろな方向に取り付いているので方向を決めて進む。沢を渡り右岸に進む。藪を漕ぎながら、明るい空間のある場所に近ずき、沢が曲がりくねってくると、クビレ田代にでる。16時28分着。

ここから、いつもの場所のテント地へと進む。16時48分着。水場があり、平らな場所も確保できる。樹林帯なので小雨なら、少しはしのげる場所である。今日は地面が濡れていて落ちている枝や木も濡れている。たき火の仕付けは時間がかかる。テントを設営して夕食の準備をする。献立は豪華にステーキである。名シェフ鈴木義兄が担当でいつも美味しい食べ物をもんだのために作る。歩荷した冷え冷えのビールで乾杯する。食事のひと時が、各自の話で盛り上がる。人生は山あり谷ありで、同期の気安さで、いろいろの体験話が聞かれて面白いですね。たき火の前で遅くまで語り合っている西島兄と鈴木義兄である。テントの中で、もう一度宴会である。

やがて静かに消灯です。28日早朝は学生時代のようにせわしない様子はなく、実に悠々

と時間を使う。森田兄と金原兄は下田代へ出かけた。帰ってくると、下田代の側にサイト跡があったとのことである。名残惜しくても、10時に出発する。来たコースを戻る。

尾根どうしに下る。やはり最後の支尾根に入る場所が間違えやすい。少し下った所で戻り、来た尾根に入る。実川林道の矢櫃沢橋に戻る。12時22分着。ここから松枝岐の民宿「郷」へ行く。温泉で疲れを癒し、近くのおそば屋で昼食を摂りながら検討会になる。

来年の山行の話になる。この仲間はまだ山行への体力と気力がある。今回がラストだから南会津に来た同期なのだが、話している中、「テントサイト場として最高の場所がクビレ田代だね」ということになった。が次回はまだ未知である。29日会津高原尾瀬口駅へ出て、鈴木義兄と別れて野岩鉄道に乗り浅草駅へと向かう。どうなるのかな？

木馬道会「古希」旅行で想う

BN 639 岩永 徹

今年は東京オリンピックから50周年、木馬道会（昭和43年卒）は、古希を祝うため茨城県大子町に、16名が集まった。1964年（昭和39年）は明治大学に入学しワンゲルに出会った年でもある。新人養成では約30キロのキスリングに面喰い、夜の正座でびんたに面喰い長崎から来た私にはとんでもない部に入ったものだと思っていた。そうは言いなが

ら当時90人以上の新人が卒業の時は23人までに減少。よくもまあ、よく卒業できたものだと思います。

大子町は綿引の出身地、12月には町長選が予定されており、返り咲きを狙ってその準備に大忙しであったが、快く迎えてくれた。

夜の宴会では、それぞれの近況を報告。私は週1回働いており、普段は、ゴルフ、フルートの練習の日々で、山には全く行っていない。大分の山本は今年の3月で仕事をやめ、ゆつくりできたので、今回奥さんと二人で東京まで来て、奥さんは東京で待っているとのこと。小豆島の森川は、俳句やサックスの練習。仙台の杉山は、退職後はウォーキングの日々。岩崎さんは、テニスを始めたら、メキメキ上達し都の大会で優勝（シニア女性の部）までしたとのこと、実に素晴らしい健康な体を維持している。一方大腸癌を患った中川は、癌と付き合ひながら、何とか頑張っており今回参加できたことを非常に喜んでた。石巻の亀山は震災で痛手を受け、いまだに復旧が進まない状況で商売もままならないとのこと、とは言え翌日は新しい奥さんを連れて観光を楽しんでいた。あと東京在住の和田、石井、粕谷、鈴木、雨宮、田中、小林、藤浦とそれぞれ自分を飾らない昔のように打ち解けた報告会となった。

木馬道会の近況報告はマネージャーの和田が卒業以来いつも発信してくれ、会計を粕谷、ワンゲルの行動記録を石井が長年に渡り取り

纏めてくれている。実にありがたいことだ。特に石井の記録は一人一人個人別に丁寧に作られており本当に頭が下がる。今後もしくお願いしたい。

翌日は、観光で袋田の滝、これは日本三大名瀑の一つで水量も多くなりの迫力であった秋は紅葉で観光客で混雑すること。この後リング狩り、茨城県の北部で福島に近いこともあり立派なリングが何種類もあり、刈り取ったリングをお土産にしていた。あとバラ園見物、刺身茹藕のお土産、昼食は「やみぞ森のビール・太子ブルワリー」で4種類のドイツビールとソーセージ、それに久慈川で取れた鮎の塩焼きとゆったりした時間を過ごすことができた。

帰りは、行きと同様路線バスで東京駅までとなったが行きは3時間だったのが帰りは渋滞で5時間もあり、バスの上から真っ赤に染まった夕焼けの東京の空と、ライトに映えるスカイツリーを見ながら、私は上野駅でみんなと別れることとなった。その夜は上野で一泊し翌日長崎に帰った。次回は何時どこで開催するかは、東京組に任せるとして、この年になるとなかなか出不精になるものだ、今まで、小豆島、宮崎、仙台、に参加したものの、不参加の集まりがかなりある、懲りずにまた呼びかけて欲しい。

ちよい悪おっさん達の還暦同期会

BN 795 濱田 稔

学生時代、全員が全員勝手な方向ばかり向いていた連中が、12月6日、7日伊豆多賀で7年ぶりに還暦同期会を開催しました。昭和



51年度卒、鈴木元監督命名のD51会のメンバーは男9人、女2人(同期会参加者は9人)。おつむに著しい後退痕、変色は有るものの、37年経っても精神構造は全然変わっていない面々。おつむ以外何も変わらないのがD51会の特徴です。

1. 一度就いた会社で37年、すっぱんのごとく食らいついたまま過ごしてきました。

2. 一度結婚したら二度と結婚せず、夫婦は一人も欠けることなく、子供や孫に恵まれ、おじいちゃん、おばあちゃんと呼ばれて喜んでおります。

当日は、再会を祝す絶好の好天、かつてのケンカ仲間も今は愉快的仲間。そんな仲間と飲みかわす美酒とおいしい料理に、楽しい時間はアツという間に過ぎました。

シルクロード 天山北路

「北新疆」草原の旅(その一)

BN 299 大内 善一

今年6月、最高齢86歳を筆頭に平均年齢77歳の19人の元気な老人たちが、13日間にわたる中国の北新疆を旅してきました。全行程3,600キロはいささか厳しいものがありましたが、自然が織り成す雄大な大草原とそこに生活する少数民族の人々とのふれ合いは、心に残るものがありました。

この紀行文をとおしてその一端をご紹介します。

たします。

去る五月三十一日より六月十二日にかけて、シルクロード天山北路三千四百キロを走破して来た。

読売新聞元写真部長平井實氏の呼びかけで参加者十九名(内女性五人)、旅行のコーディネーターは、かつて井上靖氏が小説「敦煌」の取材に現地を案内された、カメラマンで中国籍で通訳を兼ねた、石嘉福氏であった。石氏は現在世界遺産となっている敦煌の千仏洞の壁画・塑像を撮影された方で、人脈も豊富で講談社から「シルクロード写真集」を井上靖氏の序文をいじぎ共にされている方である。

新疆までは、羽田を早朝発ち、北京空港のりかえで夜ウルムチに着くという一日がかりであった。

北新疆は中国北西端に位置し、

モンゴル・ロシア・カザフ共和国の国境近くにあり、昆崙・天山・アルタイの三山脈の盆地にあり、砂漠・草原・緑地・河川・湖沼が散在しており、面積は日本の四倍以上約一六六万平方キロメートル。ウルグイ人の他、トルコ系のカザフ人、キルギス人、ウズベク人や少数民族のオロス人、ダーフル人、シボイ人などが住民の約四六%、漢族が約四十%

天山北路草原の道と
天山山脈世界遺産の旅



を占めている。

石油など地下資源と、牧畜・小麦・綿花栽培が盛んで、豊富なそれら産物は多く輸出されている。

近年、中央政府を困らせているのは、分離独立を求めるイスラム過激派のテロ。

そのため空港でのチェックは勿論、各地に検問所が設けられ、きびしい警備体制が敷か

れていた。

一行は大型バスで、一人二席づつとし、ホテルもシングルで、ウルムチ出発時に、紹興酒甕入り六ケース（一ケース六本入）を車に積み込み、昼に一本、夜に二本づつ食事の折に飲むという、楽しい旅であった。

牛・馬・らくた・羊等の放牧が多く、それを管理するのは乗馬によるものと、若者のバイクによるものが見受けられた。

麦や綿花などの、農作物は、ポプラや白樺の防風林に囲まれ、その中で栽培されており、ラベンダー畠などは地の果まで紫に染められているように咲き競っていた。

いづれにしても七千メートル級の氷河におおわれた天山山脈をのぞむ高地なので、セーターやヤッケなど日中でも着ることが多かった。また白夜なので、朝七時すぎに明るくなり、夜十時半過ぎないと暗くならないので、食事時間は朝食はホテルで七時頃、昼食は四時頃出先きのトラックの運転手などが入る街道筋の食堂で、パンパンと手延べるラゲ麺や、餃子などが多く、夜食は街中のレストランで中華料理のコースや、屋台の羊焼きの店などで、冷えていたり、冷えていなかったりするWUSUビールと、持ち込んだ紹興酒で過ごした。

六月一日 第二日目

朝食後町にでてみると、ナンを焼いている店とパンを揚げて売っている店があり、傍の

テーブルでみんなが食べている。その近くでは牛乳の量り売り、入れ物はスーバの買ひ物袋のフィルムの袋に柄杓で入れてもらって提げて帰る。

朝食後、八時半出発。天山の雪山を眺め防風林のある畑がつづく中を走る。「野生馬増殖研究中心」の標識があり、新疆には三百頭ぐらいいるそうで、遠くに石油基地のタンクが十基ほど見える。油田も見える。グルパンテュンギョト砂漠まで、延々と砂丘がつづき風紋が美しい。

ラクダしか喰べないというラクダ草が、砂漠の奥にある、全山赤褐色の火烧山で写真タイム。附近にトイレがないので、バスの前方は男性、後の方は女性がそれぞれ利用する。今夜の泊りは新疆阿勒泰市団結路近解放南路のアルタイ金都酒店で、約六百キロ走破した。浴室はここもシャワーのみであった。

六月二日（月） 第三日目

昨日のつかれを十分とり、朝も九時半起床。部屋は寒く、洗面の水も冷たい。雪解水を利用されている由で、飲み水はベットボトル二本無料で提供される。

今日は月曜日なのでアルタイ博物館が休館のため、出発も十一時とし多拉特岩画（ドルド岩刻画）を見に郊外の村をいくつか通って大きな村に行くと、民族資料館があり閉館であったが、近くに住む管理人がバスで来たわれわれのために開館してくれ、狩猟関係の

資料や実物大の遊牧民が住む移動式のパオ（包）で生活している人形の展示、そしてこれから見に行く岩刻画のパネル等が展示されていた。

その管理人に、ドルド岩刻画の場所を教えてもらいガタガタ坂道を上ると丘の斜面に黒い岩が、点在しており二、三千年前の狩猟民族がてん刻したと思われる岩に野生動物や犬などの家畜を見ることができた。おそらく自然崇拜の宗教的意図があったものと言われている。

カナス湖に行く途中、チェムルチェク古墳群のあるところに入る。青銅器時代のもので言われる黒い石に、円い中に夫婦の顔を彫られた夫婦像があり東を向いている。

男性の顔には独特の髻があり、女性の像は男性を頼るかのように傾いていた。その後には墓が盛り上っており、黒い大きな隕石があまり大分持ち去られたようだ。

大草原が美しい、パオが点々としており、歩きながら携帯で話している。パオの近くにバイクが置かれていた。

途中街道筋に石や玉を並べた露店、店の側に自転車につけたりヤカーに同じく石や玉を売っていた。石の中に植物や虫の入ったもの、振ると音がするもの大小いろいろあった。

やがて、新しくできた商店や郵便局のあるアルタイに着く。郵便局には女性が一人居り絵ハガキや切手を売っており、ハガキは八十分で、それに四元を足すと航空郵便になるこ

とが判ったが、そこには四元の切手がなく、金を預けると、夕方本局に行つて出しておきますというのでお願いした。しかしそのハガキに航空郵便と書かなかつたため帰国後十日ぐらい過ぎてからようやく着いた。

ここからカナス湖に行くまでは地元の手車以外に入らず、自然保護用の専用バスに乗る。そのバスに乗るためパスポートを提示しチケットを買う。三十人乗り中国語の説明があり石さんが通訳してくれる。

カナス湖は標高一三七五Mの淡水湖で、長



カラチュン大草原

さ二五km幅1・6kmと細長く、湖というよりも川のように、途中膨らんだところが、有名な月亮湾・臥龍湾などの絶景がある。

ラフティングやボート遊びも楽しめる。周りには樹齢三百年の白樺や松・縦の木が多い。その奥には残雪の山が見え隠れしていた。

風は冷たくセーターの上に着を付ける。

湖畔の狭い道を散策し、バスに戻り、途中蒙古トワ人部落で下車、集落を訪ねる。宗教はチベット仏教で、生活は遊牧と狩猟で、かつては、物々交換で生活し、衣料は動物の皮を使つており、簡単なログハウス風の木造の家で、雪が多いため屋根も板張りで雪がすぐ滑り降りるように作られており、庭には弓の練習用の動物の皮を広げた的があり、そこの人達はみなニコニコして気持がよく、話し相手になつてくれた。

バスの停留所まで戻り、それぞれ荷物をもって坂道を登ると今夜の宿林海山荘に着く。林の中にロッジが散在し、食事は中央の管理棟の中であつた。今日は約二百kmの行程であつた。シャワーはそれぞれのロッジに給湯施設があり、仲々暖かくならず、すぐ失くなるので、交代で入るのも時間がかかりセータを着込んで休むこととした。

六月三日（火） 第四日目

林海山荘の近くには、研修施設があり、私達以外には、ほとんど客がなく、朝早くから植林をしている人が二人ぐらいしか居らず閑

静で、十分休養することができた。大勢は昨日訪れたカナス湖を再訪し、上流の方まで自由撮影に出掛け、途中一人が道に迷い心配したが、山の中に一軒屋があり、会話が通じないなか何とか車で案内してもらうと別の宿泊施設でそこからようやく合流でき、一同安堵したことであつた。

夜は暗くなるのが遅いので、朝方三時頃起きて満天の美しい星を眺めることができた。

シルクロード大草原の旅

BN 299 大内 善一

夏の霧 霽れて天山 氷河現る
夏草や 大草原に 天馬群れ
大夏野 駿馬列なし 天空へ
鬚の騎士 駱駝群れ追ふ 砂漠灼け
夕焼けて 瑠璃極めたり 五彩灘
薫風や 芳香放つ ラベンダー
磐座に 太古貴人の 墓灼くる
馬蹄打つ 野鍛冶親父の 汗しとど
大青野 百里走破し 杯を上ぐ

伊南川

BN 751 諏訪本 充弘

本年度より正部員養成は南会津東部の男鹿山系から尾瀬、会津駒方面へと山城を大きく変更することになりました。理由は男鹿山系があまりに荒廃していること、また熊が跳梁跋扈していることが主な理由で、40年前には車が行き交っていた大川林道が今や自転車も通れないというありさまです。

針生山荘をつかうのが前提になってみると、この際、日本で一番いいところを、いっぱい歩こうということで、尾瀬、会津駒に決めました。

今年度の二年生は9人、付き添いはリーダーのマネージャー鈴木優花、4年の荒澤、鈴木竜一、8月28日出発、鬼怒沼、長蔵小屋、でサイトして、燧ヶ岳をのぼって、8月30日昼尾瀬御池を通過、そこで荒澤が下山、変わってコーチの井上と主将諏訪部が合流、9月1日針生山荘に入荘という予定、小生は井上、諏訪部を御池に連れて行って、荒澤を会津田島に送り届けて、小屋入りに備える。さて31日はなにをしようかと考えたとき、そうだと伊南川で鮎を釣って食わしてあげよう。

ようやく本題、伊南川は源頭は黒岩山、実川、松枝岐川、と名前を変え途中館岩川を加えて只見川に合流する河川で、館岩川の合流から、只見川に合流するまでが、鮎釣りができる、利き鮎大会で準優勝したとのことで、その世

界ではそれなりの知名度を有する川である。漁協で問い合わせると、うまい人だと10匹くらい、ゼロの人めかなり居ますよとのこと、フフフ私が長年道志川で鍛えた釣り師だということを知らないな、と思いつつ、旅館を紹介していただいた。少なくとも、二年生と同行する優花と竜一の分は確保せねばならんと決意を固めて、最悪の場合せめて鮎飯でも食わせてやろうと道志で釣った鮎を宅急便で手配して、釣り道具一式、釜、自作の炭を積み込んで出発、井上、諏訪部を拾って、予定通り御池で本隊を待つ。昼ごろ合流、合宿中だ



釣果

が、アイスを食べわしてやり、荒澤と見送って、田島に向かう。荒澤を送ってようやく川に出たのが4時、おとり屋の主人が漁協の役員で今からでは目釣り券はかわいそうだからいいよの声に甘えておとり二匹と明目の券を買って、川に出る。買ったおとりは主人が釣ったもので、二匹で1200円リーズナブルだ。最悪、優花と竜一の分は出来たなと思いつつ釣り始める。はじめて10分ほど、強烈な引き、普段使っている竿より長い9m×9.5mの竿が思い切りしなる。引き抜きはやめて慎重に寄せて



晴れて正部員に

訃報

BN 265 徳谷卓史OBが平成26年4月22日に
ご逝去されました。
BN 680 津布楽誠OBが平成26年7月23日に
ご逝去されました。
BN 267 吾妻年男OBが平成26年11月2日に
ご逝去されました。
BN 257 石丸栄子OBが平成26年12月19日に
ご逝去されました。
ここに謹んでお悔やみ申し上げます。

取り込む、かなりの型だ！その目は油断して途中はずれたのが1匹あったが8匹ゲット、目標の20匹まで目途をつけて納竿。

翌日昨日の場所とその下流で3時まで16匹都合24匹最初のおとりと合わせて26匹確保して、外道のはや1匹を加えて出迎えに来る4年勝田三月以下を迎えに田島に向かう。

管理人の星さんに一家の分3匹あげて、入荘。当日、朝出の尾崎と尾崎が連れてきた部員合わせて24名でバーベキュー。正門が蜂のため使えないので居間の方から出入り、雨の予報なので、ビニールシートを準備して主に3年生が焼き担当、大いに盛り上がった一夜を過ごした。

2年生は松田、永田、神内のトリオに加え、3月からはドイツ留学中の池田が復帰するので、クラブ史上最強の女性陣で今から楽しみです。

〔新執行部紹介〕



増田 拓也
会計、衛生係チーフ、3班
理工学部電気電子生命学科
出身地：神奈川県
川和高等学校



野村 啓悟
主務、編集係チーフ、2班
法学部法律学科
出身地：神奈川県
神奈川総合高等学校



舩田 献太郎
主将、針生小屋係チーフ、4班
経営学部経営学科
出身地：神奈川県
横須賀学院高等学校



本行 優生
3班PL、手白小屋係チーフ
理工学部電気電子生命学科
出身地：神奈川県
生田高等学校



白井 真彦
2班PL、通信・編集・写真係チーフ
理工学部建築学科
出身地：愛知県
明和高等学校



前川 晃慶
1班PL、気象・手白小屋係チーフ
理工学部機械工学科
出身地：東京都
東京電機大学高等学校



土井 崇弘
1班SL、記録係チーフ
法学部法律学科
出身地：埼玉県
明治大学付属中野高等学校



宇津木 俊亮
1班SL、装備係チーフ
政治経済学部経済学科
出身地：神奈川県
橘高等学校



望月 健太郎
4班PL、情報・トレーニング係チーフ
情報コミュニケーション学部情報コミュニケーション学科
出身地：千葉県
明治大学付属中野高等学校

平成27年度現役指導スタッフ紹介

●部長 長峰 章

●顧問 坂本 清 新田 功

●監督 諏訪本 充弘 (751)

●コーチ 井上 堅一 (1064) 尾崎 剛史 (1174)

杉山 文啓 (1252) 沓澤 優子 (1258)

安田 光輝 (1264)

年間行事予定

平成26年 10月 ワーク合宿 (済)

11月 秋合宿 (済)

平成27年 2月 スキー合宿

3月 春合宿

4月 新人歓迎W

5月 新人養成W

7月 初夏W

8月 夏合宿 (地域未定)

9月 正部員養成W

9月 リーダー養成W

■山小屋の利用を希望する方へ

下記の現役小屋係まで連絡願います。

○奥鬼怒山荘 (手白小屋)

前川 晃慶 090-7943-2852

本行 優生 090-3815-2194

○針生山荘 (針生小屋)

舩田 献太郎 080-3393-2676

■平成26年度卒業生歓送迎会のお知らせ

日時 平成27年3月7日 (土) 12:00~14:30

受付開始 11:30

会場 明治大学 岸本・宮城ホール

(リパティタワー23階)

会費 6,000円

寒中御見舞申し上げます。

祝 50 号

昭和 39 年度卒業 山久会



寒中お見舞い申し上げます

祝50号



昭和40年度卒業 横八会

編集後記

BN 879 井上 稔也

おかげさまで「薫風」も50号の発行を迎えることになりました。これもひとえに、原稿や情報をお寄せいただいた皆様方のご理解とご協力の賜物と、深く御礼申し上げます。

「薫風」は会員諸氏の集いの場です。ただく原稿は山に関することが多くを占めていますが、現在は山と離れている方からも、いま嵌^{はま}っている趣味や旅行記などの近況報告、あるいは関わっているボランティア活動の報告など、もつと自由にお使いいただいで結構ですので、どしどしご投稿ください。

ところで、広報推進部員も年々高齢化しており、そろそろ新たな発想で刺激を与えていただける方々の参加を切に期待しています。

求む、BN一〇〇〇番台！

発行日 平成二十七年一月
編集 鈴木 康弘 一色 雅男
池上 勝彦 石井 克太
猪狩 稔 加藤 章一
井上 稔也 日暮 浩美

発行者 明治大学体育会

印刷所 ワンダーフォーゲル部なため会
三協印刷株式会社